

二十三歳、その外れんじよ昵近の歴法華堂に群参あり(最明寺殿)いかに天女丸、來春よりは汝をも政道の連署に加ふべし(最明寺殿)【連署】鎌倉幕府職制の一。執權と共に公文書に署名する役なればこの稱がある。北條家の一族で重器ある者これに任せられた。

*れんぜんあしげ 殿の御馬ばさび月毛、連錢茸毛、鹿毛茸毛(天鼓)

【連錢茸毛】白毛に黒い茸毛がある茸毛といひ、茸毛に淡褐色の圓い斑文の鏡を連れたやうになれる馬の毛色をいふ。

*れんちゆう さては鹽治殿の篠中か(兼好法師)

【篠中】公卿・大名の正妻の敬稱。

れんによ 箱に入れしは連如様の名號(今宮)

【連如】諱は兼壽、應永二十二年二月に生れ、明應八年三月齡八十五で遷化し、山城本願寺第八代の高僧である。深識篤學で教行信誼、大要妙には殊に造詣深く、廣宗中興の人と稱せらる。畿内北越地方で描いた佛祖多く、自筆の名號は信徒の深く尊崇する所である。明治十五年慈燈大師の諡號を賜はる。

れんふくわいもん 連府槐門の位に上り、上見ぬ鷲と時めきし(藤原)

【連府槐門】大臣三公をいふ。「連府」は徒然草第二百十四段に「晋の王徳大臣として家にはちすをらえて愛せし時の樂なり、これより大臣を連府といふ。「槐門」は周の世に三槐を外朝に植えて三公その下に班列した。槐は樹で人を懐ける義、轉じて三公の意にいふ。

*れんり 機綱の木の相生を連理の契に擬(曾根崎) 連理の枕・比翼の床、かたしく人も諸共になき

世の中の習(律國女夫婦)【連理】二樹相對し脈理を連接して生じること。よつて以て夫婦の契を連理の契といふ。白居易の長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願為連理枝、天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」。【機綱】「木の相生」は「そねさき」の條の圖を見よ。

ろ

ろろこく はや漏刻も夜半過ぎ(弘徽殿)

【漏刻】往昔用いた時計である。貞丈雜記卷十六に「古禁中に漏刻といふ物あり、銅の壺に水を入れて、壺の下に穴ありて水の滴漏るやうに作りて、其壺の水の中に筋を立てるなり、其壺を漏壺といひ其水を漏水といひ其筋を漏筋といふ、其筋に刻めつけ置きを漏刻といふ、其刻めの數は四十八刻むなり、一時の間を四刻四刻に定めたる物なり、此筋を水の中へ立置くと、水漏りて水の滿減るに隨ひて筋の刻め段々に見ゆるなり、二つの時一いつ見ゆるは子の一つと云ひ、二つ見ゆるは子の二つといふ、以下これに准じ知るべし云々」。ろろじ そくばんどうに名の高きろろじ(六藏が御供は、げに頼もしき働きなり(田村))

【ろんじ】「ろんじ」といふ、六の符牒。この文の「そくばんどう」の「そく」は「の符牒」は「ばんどう」は八の符牒であつて「きり」の條を見よ。これを足の強いこと坂東に名の高き(和漢)三才回會卷七、人倫部に「國人、備人言羅、和名久知止利、今云羅乎、又云無萬加本」六藏にいひかけたのである。六藏又は八藏は馬方の通稱である。

*ろくせん (大維冠) 【樓船】屋形船。類書蘇婁に「大船上に樓を施すを號して樓船といふ。【ろくだいこ】 兩の手に金輪、世間で諸ふ親子籠太鼓、跡は天鼓微塵(浦春登)

【籠太鼓】曲名。この文は籠太鼓に入年の字をいひかけたのである。

*ろく 三五郎守するならろくにしやと喚き歸れば(天細忠) おでんをろくに寝させて、母様もちとおやすみと言ひければ(女殺) どれどもかげすみようこそ、サア先ろくにと挨拶も(嵯峨天皇) おのれなら尤もろくで果てまい奴ぢやと常に言うたが造うたか(母波與作)

正、または平の義。平安。完全。正圓を「まろく」といひ、陸地を「ろくち」といふ「ろくもこれである。

ろくかくのつっさや 【ろつかくのつっさや】を見よ。

ろくく 重き六具に五體を釣られ、かつげと臥して足立たれば、鏝を着てさへその臍病、鯨波聞いたら目がまばう(川中島) 【六具】和漢名數に「六具」(鏝)の甲、貴、類、賞、佩、脚、脚、と見え。單騎要略・五、に「鏝の六具は類賞、鉢巻、淫、腰、扇、當、小手をいふ。和訓栞に「ろくく」俗に六具を占といふは甲をかためるより出たる詞也、僧家の六物などいふ事に倣ひたるにやといへ

ろくくわんおん (安夫史) 【六觀音】手観音、馬頭觀音、十一面觀音、聖觀音、如意輪觀音、准提觀音をいふ。或は准提觀音の代りに空齋觀音を加へてもいふ。

ろくげのびやくさう 守本尊普賢薩埵・寶威徳上王佛の御國を出て、六牙の白象に鞭うつて(五人兄弟)

【六牙白象】普賢菩薩は六牙の白象に乗つてゐる。蓋し象の深沈で強大な力を持つてゐるやうに、よく定力を以て諸行を攝取することを具體化したものである。因果經二に、「爾時普賢菩薩觀轉胎時至、即乘六牙白象發三摩摩宮云々」。

*ろくこく 秦の始皇六國を呑んだる連衡の謀(國性彦) 【六國】支那春秋戰國時代の六國、即ち韓、魏、趙、齊、楚、燕をいふ。

*ろくこん 人間の念慮限りなく、息の通ふ間は六根の樂欲にひかれ(舟波與作) 打つ杖は師の心法、打たるる弟子の六根淨、御目も眩み御息もばや絶え、地清淨に見えければ(龜池) 天清淨、地清淨、内外清淨、六根清淨(卯月紅葉)

【六根】眼耳鼻舌身意の六根をいふ。「根」は草木の根の如く、増上の義で強き作用を與へるもの謂である。六根によつて作る罪障を斷除して得る所の力用清淨無礙なるを六根淨、六根清淨または六根自在といふ。六根によつて作る罪を六根罪障といひ、その罪障を斷絶して再び罪を犯さぬやうにするを六根斷絶といふ。

***ろくさん** 董卓が眼・祿山が髭、放逸無慙の驕り人(嵯峨天皇)
〔祿山・安祿山をいふ。胡人にて性狡毒多智。唐玄宗皇帝の寵姫楊貴妃及び其左右に結託して帝の信任を得、平盧范陽河東の節度使を兼ね、南陽に驍騎、南向して關を犯す。玄宗皇帝蜀に奔る。祿山將一、其長子安慶緒の爲に弑せられた。〕

***ろくじかりん** 六字かりん・八字文珠(嵯峨天皇)
〔六字河臨(六字河臨法をいふ。調伏と息災とを祈り、六觀音(その餘)を本尊とし、船を河に浮べて檀を構へ、六字咒を念じて法を修することをいふ。この法もと東寺の秘法であったが、後には天台にも傳へて修する。〕

***ろくじさんまい** 唐土晋の慧遠法師蓮華漏を刻み、六時三昧の徒然と(用文章)
〔六時三昧(晝夜六時に専心佛事を勤めること。六時とは晨朝(卯の時)、日中(正午)、日没(酉の時)、初夜(戌の時)、中夜(子丑の時)、後夜(寅の時)をいふ。六時に禮讃偈を誦するを六時禮讃といふ。〕

***ろくじのかね** 四天王寺の六時の鐘
〔初夜を知らせて更けにけり(三世相(六時鐘)大阪四天王寺の鐘(六時堂の前)は古來有名である。徒然草に「いはゆる六時堂の前の鐘なり、其聲實鐘調のこもれるなり。六十四部の諸論 傳へずして六十四

***ろくじのふろく** 六十六部の納經者(甚繁太平記)
〔六十六部法華經六十六部を日本六十六ヶ國の靈場に一部づつ納める行脚僧をいふ。行装は天蓋を被り白衣を着、笈を背ひ錫杖を携へ、國分寺又は一の宮に奉納したものである。その始は室町時代に起り、江戸時代になつては僧侶ともに之を行ふ。轉じて諸國の神社佛閣を巡禮する遍歴僧をいひ、六十六部は略して六部ともいひ、厨子を買ひ鉢を鳴らし、經文を誦誦しつゝ家毎に布施を乞ひ歩いたものである。〕

***ろくじやく** 晩にはこちらから送らせまじよ、六尺どいみなしや(大經師) よしお屋敷へ伺候して、ろくじやくどもが手にかかり、ぶち殺されうば殺されう(廻籠)
〔廻籠昇夫をいふ。廻籠昇夫は矮小の者ではないので、大男なのがよい。故に古來大名などは廻籠を昇る者に骨格速く身長六尺もあつたやうな大男を選んだことから、廻籠昇夫を六尺と稱するに至つたのであらう。北條言操梅園日記(卷四)に「ろくじやくは力者を彩れる也、力者の眞昇事は長谷寺觀音補陀形原本保元物語、法然上人繪詞、類聚大輔任等に出でたり云々」とあれども、「ろくじやく」を「ろくじやく(力者)の轉訛とするは如何にや。また史記(秦始皇本紀)に「數以六爲紀、符法冠皆六寸、而輿六尺云々」と見えてゐることから、輿の長さ六尺の故事から、廻籠昇夫を六尺と云ふに至つたとの説も牽強であらう。ろくじやくだいまやうじん どう取の

部の諸論に通じ(釋迦如來誕生會) 往昔印度に行はれた天文、醫藥、文學、博物等の六十四部の諸論をいふ。その書目には佛本行經に見えてゐる。

祈は四三五六社大明神(女殺)
〔六社大明神山城國葛野郡にある六所神社を云うたのであらう。兼州附志、神社門下葛野郡の條に「六所神社」或作三六、在衣笠山東麓鹿苑寺南、未知祭何神也、一説伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷春日、以上七社之中、除近隣平野社、而其外勸請六社者也、(或は又平野社六所宮とも云ふ由なれば、それのことか)。この文の四・三・五・六は體六の采目(數をきかされたものであつて、そして六社にひかけたのである。〕

***ろくじやくきん** 陶淵明が漉酒巾、四明大師の律衣を着し、儒者佛者と
も分き難き老居士(唐船僧)
〔漉酒巾(酒を漉す布を頭巾にしたものである。これは陶淵明が酒を愛したによつてかくしたもので、一般に用いたものではない。晋書陶潛傳に「漉酒巾、每酒熟、取頭上角巾、漉酒復著之。〕

***ろくじやく** 六親を地獄に落す大惡僧(烏帽子折) その一心の不所存ゆゑ、六親眷屬地獄に墮し給ふ、よな(貧古教傳)
老子の注に、父子兄弟夫婦をいひ、前漢書に父母兄弟妻子をいうてある。

***ろくじやく** 源氏の御代の腰押
は六神通の文覺が隨ひ守る神と、君久しき阿羅漢(雲女)
六神通(阿羅漢)の苦樂の形相及び六神通(阿羅漢)の苦樂の形相を見ること自在、天耳通(及一切世間の苦樂なるをいふ)一切世間の苦樂の苦樂

音聲を聞くこと、他心通(六道衆生が心に思自なるをいふ)、宿命通(自他の宿命所作を知るをいふ)、宿命通(自他の宿命所作を知るをいふ)、作自在なるをいふ)、漏盡通(有漏の神足通(飛行術を得て動)、漏盡通(有漏の滅盡して三界生死の)、以上六神通は阿羅漢の得る通力である。阿羅漢とは佛道修行者が悟り到達する最終の地位である。)

***ろくじやく** 六孫王のこかた満仲公に相續き、古今の名將と呼はるる頼光(弘徽殿)

***ろくじやく** 生死の悟を得ざる故、六道の苦輪を廻つて地獄に落つると承る(孕常盤) 横に切れ行く道筋にしよんぼりと(生玉) 内外六根清淨とは世に亡き魂の道しるべ、六道四生の淨めぞかし(卵月調色) 二人手を組む生死の巷、命の境四斗梅に、六道四生、ぎつと詰つて動かれず(籠籠三) 六道能化の地藏菩薩導く玉の數數に(嵯峨天皇) 六道の辻(永朔日)

〔六道六道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六趣をいふ。六道四生とは、六道と六道の衆生に屬する胎生卵生濕生化生をいふ。胎生とは人間や獸類の如く母體の胎内に過當の發育を遂げるものをいふ。卵生とは魚鳥の如く卵で生れるものをいふ。濕生とは蛆蟲の如く濕地で生れるものをいふ。化生とは神などの怨怒として生れ現はれるをいふ。四斗梅に六道四生」とあるは、六道四

〔六道六道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六趣をいふ。六道四生とは、六道と六道の衆生に屬する胎生卵生濕生化生をいふ。胎生とは人間や獸類の如く母體の胎内に過當の發育を遂げるものをいふ。卵生とは魚鳥の如く卵で生れるものをいふ。濕生とは蛆蟲の如く濕地で生れるものをいふ。化生とは神などの怨怒として生れ現はれるをいふ。四斗梅に六道四生」とあるは、六道四

〔六道六道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六趣をいふ。六道四生とは、六道と六道の衆生に屬する胎生卵生濕生化生をいふ。胎生とは人間や獸類の如く母體の胎内に過當の發育を遂げるものをいふ。卵生とは魚鳥の如く卵で生れるものをいふ。濕生とは蛆蟲の如く濕地で生れるものをいふ。化生とは神などの怨怒として生れ現はれるをいふ。四斗梅に六道四生」とあるは、六道四

〔六道六道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六趣をいふ。六道四生とは、六道と六道の衆生に屬する胎生卵生濕生化生をいふ。胎生とは人間や獸類の如く母體の胎内に過當の發育を遂げるものをいふ。卵生とは魚鳥の如く卵で生れるものをいふ。濕生とは蛆蟲の如く濕地で生れるものをいふ。化生とは神などの怨怒として生れ現はれるをいふ。四斗梅に六道四生」とあるは、六道四

ろくさん ろくだう

生に六斗四升をきかせて面白う云うたのである。「六道能化」とは、佛菩薩が衆生を化益する爲に普く種々に身を示現して六道に入り、以て衆生を濟度し給ふをいふ。地藏尊や觀世音などは六道能化の善隣である。「六道の辻」とは、六道の分難道の義、冥途に通ふ道の意にふ。

ろくち 險阻にかかつては蹄に草の葉を踏んでも、ろくちを行くよりなほ易し(十二段) 心ばろくちを歩むと思へども逆様に見えけるかや(反魂香)

ろくちく 牛馬六畜に野山をかけらせ(根元首杖)

ろくちざう (井筒) 六畜馬牛羊豕犬鵝。六地蔵(地蔵菩薩は衆生救済の爲に御身を六體に別つて六道(その條)に顯現し給ふ。即ち金剛地蔵は左手に閻魔杵を持ち右手に成辨印を結び、地藏道を濟度される。金剛寶地蔵は左手に寶珠を持ち右手に甘露印を結び、餓鬼道を濟度される。金剛悲地蔵は左手に錫杖を持ち右手に引接印を結び、畜生道を濟度される。金剛觀地蔵は左手に眞願印を結び、人間道を濟度される。預天寶地蔵は左手に如意珠を持ち右手に說法印を結び、天上道を化導される。

ろくつう 六道自在の神足に(釋迦)

ろくど 「菩薩の六道」を見よ。

ろくちからみつ 六波羅蜜の功德にて、畜類なれども菩薩の行(聖徳太子)

〔六波羅蜜〕波羅蜜は梵語、波羅蜜多(Parāmitā)の略。到彼岸または度と譯す。生死の岸より涅槃の彼岸に到る義である。波羅蜜多は菩薩の大行で、これに布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種がある。よつて六波羅蜜といふ。

ろくばんがしら 乗掛は六番がし(のりかけ)ら。使番侍大将奏者番旗大将の(後先に(堀川澄賢))

ろくみやく 聲を聞いて六脈を察し、一粒一七の薬を與へ(孕常盤) 目を塞ぎ六脈靜に考ふれば、浮大にして活活と溢れたり(冷泉節) 一息切斷の經絡六脈絶え絶えに、息の通ひ路ふつつと切れ(繪草紙)

〔六脈〕新刊勿體子俗稱八十一種經(元和三年木活字版)に、浮沈長短滑澀の六脈を擧げて詳説してある。具原開軒編「和漢名數脈の條に「心脈」 肝脈上 腎脈中 上八左手肺脈寸 膈脈關 命門上 又 浮沈迎歌滑澀」六脈浮大で活々と溢れるは癩癧の兆候である。

ろくちく 雲にも昇れ地にも入れ、非想非非想他化自在六欲天も高からず(日本武尊)

〔六欲天〕欲界の六天、即ち四王天、切利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化天をいふ。

ろくさい いぬめらば人の門戸に立ち一紙半銭をろくさいする乞食坊主(一心五戒魂)

〔羅刹〕施與を乞ふこと。饑餓屋本・節用集に、「羅刹」貝原好古編和爾雅、言語門に、「羅刹。佛氏出外而乞食謂之羅刹」。

ろし男 忍ぶ戀路をせきたいの、女南男蘭は呂州の姿(生玉)

〔呂州〕風俗呂州(即ち風呂袋)の略で、湯女をいふ。御雜女に大阪中の茶屋「白入」呂袋」と見え、野白内證鑑「寶永七年刊」五之巻に、「總て呂州は色茶屋の女、ちりは綺羅麗にして、風俗しやんと小取まはしなり、身持は手の物にて日毎に洗ひ、首筋清らに髪は定まつて大扇田、象牙の櫛のまな板ほどなるをまじ、弄方より人も思ひつかず顔なれば、白粉濃く口紅用拵なくぬりくり、簪髮切色の絹の下紐をしやんと裾短く、ばつとしたる模様の浴衣云々」と(人倫朝聖圖歌敷)

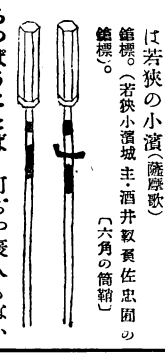


見えて、呂州は即ち湯女をいうたものであるが、後には呂州を白入(その條を見よ)と混同し、百花群林に「衆人、名呂州」一見えてある。無州雜流(元禄十年刊)に呂州のことと記すに「女一人二時を限り揚代七女集、禮代は十五女其座の趣向次第、體代送り迎ひ一町二町とも一匁、橋を越ゆれば二分高し、お翠ならば道頓堀あじろ天満甲斐塚秋田、これ此中宿にして自由をなす所」と見え、御前義經記(正徳二年刊)に「それつらら呂州の色をかがるに、日まし月ましいたりをきはめ、陸地を踏むこと更になし、おぼろ染

につかみ鹿子、日野羽二重は一昔、見る目にかかることもなく、もみうらとみに身をふかし、一つ一つ逢ふ客は秋の木の葉と餘所にのほ、涅槃の床に入る事なし」と見え、全盛を張つたものである。延寶から享保にわたつて大坂には扇屋呂、額呂などといふがあつた。生玉心中のさかば、替て天満五丁目五右衛門の扇屋呂の湯女を勤めて全盛を張り、伏見坂町の低級な遊女より羽振りを利かした者である。ふるに「風呂」をも見よ。(くわしやの條の畫をも見よ)。

ろちやうらん 菓子に取つては、さすてら・ほるてら・砂糖・羊羹・腸腸(天神記)

〔羅刹藥〕菓子の名。書言字考「服食門」に「羅刹藥」。若狭小濱城主酒井教實佐忠團の鎧標。(六角の筒鞘) (六角の筒鞘)



ろつぼうことば 何ぢや寝人もない

六法詞(一心五戒魂) 在時流行しその遊の遊遊遊の風俗を六法といひ、その者の遊、語氣強き言葉(食ふをぶどい)を六法言葉といふ。但言葉覺に「六法は無法者と云ふことなり、奴と云に同じ云々、劇場にて兩手を廣げてりきみふる姿を六法といふ。按じれば六法は當字であつて、「らんばら(羅刹)の轉じた語で、亂舞を「らんばら」を「らんばら」を「らんばら」といふ。類である。平安朝の末葉以降僧徒であつて武僧となし、武器を執つて戰に従事した僧兵(衆徒)といふ。

を六万衆と云うた。蓋し六万衆は亂暴衆の義
頭。に立つ 其方が家を見捨てては
後家も子供も路頭に立つ(女殺)
乞食となるをいふ。

るませ、さい、とうらい、さんな、
同じ事とよ豐川に、壁の高瀬がさ
す腕には、はま、さん、きう、ご
う、りう、すむむ。(冥途飛脚)

「らませ」は六、「まら」は掛聲、「とうらい」は
十、「さんな」は三、「はま」は八、「きう」は三
「さう」は九、「ごう」は五、「りう」は六、「すむ
む」は四であつて、本拳に「唐音又はその説
である。」「けん」を見よ。同じ事とよ云々は、
拳の手同じことよとのよと同語詠豐川をら
ひつづけ、川の縁より高瀬がさす濱にいひか
けて八咫といひ、拳の勝負にはずんで高聲と
なり腕を突出すをいひかけて、壁の高瀬がさ
すかひなといふたのである。豐川、高瀬は遊
女の名である。

らんじ
「きり」ろくじを見よ。

わ

わいかち 艦船に櫓をたてちがへわ
いかちを入(最明寺殿)

【艦船】わきかちの音便。船の兩舷に附ける
櫓。和漢船用集・卷十一、用具之部、偏舵の條
に、「軍艦等わいかちと云は船楫にのること
をいへり」艦船に櫓を立て云々を見よ。

*わいだて 上帯草摺わいだてにむ

んすむんすと取付いたり(兼好)

【脇立】襦を着る前に右の脇にあつてゐる具であ
る。札の上を築帯で包む。草摺一枚下りであ
る。これを脇立の草摺又は右手の草摺と云ふ。

*わいら 體自慢に人らしい扱と
はほんの男の出入、わいらが知る
こつちやない(酒香童) わいらが
居ればやかましい、とつとと行
け(博多)

「わいら」(我等の)音便。汝等の意にもいふ。
わうえん 第二番の懸物(晋のわう
えんが筆の跡に、龍門の瀧の流れ
を鯉の登る勢なり(大掛物)

「わうえん」王淵であらう。但し晋ではなう
て元代の畫家である。古今萬寶全書に、「王
淵字は若水と云、澹軒と號す抗人なり、幼に
して丹青をならふ、趙文敏おほくこれに指教
す、故に畫く所皆古人を師とす、一筆院體な
し、山水は郭熙を師とす、花鳥は黃筌を師と
す、人物は唐畫を師とす、一精妙なり、尤
墨花鳥竹名にけし、當代の絶藝也。」

わうぎし 異國の王義之・趙子昂が
石に入り木に入るも和畫に於て例
なし(反魂香)

【王義之】支那昔の人、字は逸少、草隸に妙を
極め、丹青も亦非凡。【王羲之】趙子昂が石に
入り木に入る。を見よ。

わうきやう 玄雪の冬の夜はわが身
を以て衾を暖め、三伏の暑き日は
枕を拂ふ扇に黃香が遺風をあふ
ぶ(持統天皇)

【黃香】字は文強といひ、後漢安陸の人。九歲
で母を失うて父に事へ、夏月には枕席を扇
ぎ、冬には身を以て温被して孝養を盡した。

博く經典に通じ文章を能くし、官尚書令に至
つた。【王羲之】後漢黃香、字文強、江夏安
陸人、博學、經典、究三構道術、能文章、京師號
曰天下無雙、江夏黃香、官至尚書令、郡太守、
陶淵明曰、香九歲失母、思慕骨立、事父竭
力致養、冬無被褥、而盡涼、暑則扇床
枕、寒則以身温席、和帝嘗之特加異禮。

*わうくわん 市の進殿の差料に
刻まれ骸を往還に曝す法もあ
れ(續經三) 石の物言ひ壁に耳、殊
更(こ)は往還ぞや(遊義經)

【往還】街道。
*わうじやうずくめ 又五郎義長は
わうじやうずくめの坂田の公時、
後下りの懸烏帽子弘徽殿、目の前
にて書かせしと申すからは、わう
じやうずくめ如何なる難題書かせ
しも知れず(升簡)

正しくは「あふじやうずくめ」(厭狀)であ
る。人を無理におしつくること。無理厭狀。
増補御書集覽に「あふじやうおして人にか
かする文なり。」「盛衰記二十三人のものをも
心を外にすかしとり、人をおどしておもふ
謙の文をかかせんと仕るをば厭狀と申」
と見え、又「あふじやうずくめ」むりあふじ
やう。人を無理におしつくるをいふ、(和訓栞
狀より出たる詞なり)と見え、(和訓栞
に「わうじやう」口語にいふは往生にて淨土
門の詞也、よて往生すくめ、往生ごかしなど
の俗語あり、文字に据たる也)とある説はい
か。

王子王子は九十九所 飛鳥の宮・濱
の宮・王子王子は九十九社(反魂香)
抑も當社はこれ三熊野の、九十九
所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】飛鳥の宮、濱の宮、王子王子は九十九社(反魂香)
抑も當社はこれ三熊野の、九十九所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】飛鳥の宮、濱の宮、王子王子は九十九社(反魂香)
抑も當社はこれ三熊野の、九十九所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】飛鳥の宮、濱の宮、王子王子は九十九社(反魂香)
抑も當社はこれ三熊野の、九十九所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】飛鳥の宮、濱の宮、王子王子は九十九社(反魂香)
抑も當社はこれ三熊野の、九十九所の王子王子、若市王子とたたせ

給ふ(學常經)

王子とは、熊野行幸の時細休所毎、時に臨
んで熊野本社を移し奉りた地で、熊野街道に
は王子社が九十九あるといふ。蓋し九十九は
大數をいふたもの。和漢三才圖會に、凡熊野
王子權現社、自攝州東生郡至熊野地、有
九十九所。

*わうせうくん 唐の虞氏君・王昭
君・貴妃・李夫人をうつつとも此上
はよもあらじ(天智天皇)

【王昭君】漢元帝の後宮にあつて極めて美人で
あつたが、匈奴に送られて薬を飲んで胡地に
死んだ。

*わうだう (用明天皇(振袖始))
【王道】王道に對する稱、仁義を以て天下を治
めること。をいふ。

わうだん 疑もなき黃疸神、汝の手
では判の色も違ふべし(振袖始)

【黃疸】膽汁色素によつて皮膚粘膜等黄色とな
る病氣で、皮膚の黄染と同時に癢痒を感じ、
尿汗、唾液、膽汁、痰性分泌液は黄染する。療
法として昔は吸物殊に鮑の味噌汁を多量に攝
取した。

わうばん 曆なければ當年の吉方は
知られども、わうばんも年徳も本
國こそは恵方なれと(百合歌)

【黃幡】陰陽家の祭る八將神の一。軍陣の守護
神である。和漢三才圖會、卷五、曆占類、黃幡
の條に、「按黃幡以未辰丑戌四方、順巡之、
如子年、辰、丑年、寅年、戌、卯年、未、以下
亦次第如此、曆家云、向此方、司射初宜」

わうまろにち この世からかかる苦
患に往亡日、島田亂れてばらばら
ばら(大經師音聲)